

第十八章 獄門島の悪霊祓い

Une île, entre le ciel et l'eau Une île, sans hommes ni bateaux Inculte, un peu comme une insule Sauvage, sans espoir de voyage Une île, une île, entre le ciel et l'eau

(島よ空と海のはざままで 行きかう人も船もなき島よ 荒れたまま人をあざけるかの如く もはや外に出られる希望はない 島よ、島よ空と海のはざままで テキトーな訳 坂の上の熊さん) セント・レナ島に流されたナポレオンを歌ったセルジュ・ラマの詩がその身に沁み込むような思いで、膏藥を吹き出物に浸み込ませている獄門島のお能ちゃんだった。

元より隔絶された離島であったから流行り病とは無縁だったが、同時にこうした病気に対する免疫力をも持ち合わせていなかった。

獄門島の歴史を記す犬神文書や鬼首村村誌によると、百年近く前に水疱瘡らしき流行り病が出た記載は見つかるものの、現存する島民にとっては初めての出来事だった。

幼少の頃に既に水疱瘡を経験している太湖原校長や苗院に住む横溝先生は島の外から来た人間だったので、よもや水疱瘡がこれほど大きな被害をもたらすとはゆめゆめ思ってもいなかった。

巡回診療船のほおでえ看護師と帰依住職は満州旅行中。フリーランスの外科医の大間美知子医師は専門外で、五時になると「いたしません」と帰ってしまうので、薬剤師の横溝先生の薬だけが頼りだった。

そんな中、八墓のお守りをしているお金さんとお銀さんは何の影響もなかったので、この二人は百歳を越えているのだろうとわかった。

お能ちゃんは月野雫さんがエビを食べて満月の夜に脱皮するようになった話を思い出し、エビを食べてみたのだが、満月はまだ遠く、偽装中国食材ではない健全な瀬戸内のエビでは霊験はなかった。島の反対側に生息するカブトガニも食べてみたが、全然効果がなかった。

「お銀やあ。島の流行り病は収まりそうもないなあ。」

「のう、お金。いよいよとわしらの出番のようじゃな。」

「ホンマにあれで島の病が収まるのかのう？」

「今動けるのはわしらかおらんじゃろ。」

「動ける言うても、ちかごろ肩が痛くてのう。五十肩かなモシ。」

「あんた、五十年前にもついことゆうてなかったか？モシ。二巡目の五十肩か？モシ。」

「肩さえ治ればマウンドに立てたのじゃがなあ。」

「広島はどないなつとんや？衣笠は出場しとるかのう？」

お金さんとお銀さんの話は野球の話になってしまったが、ほどなく

「お銀やあ。島の流行り病は収まりそうもないなあ。」

話は振出しに戻るのであった。

本州の尾道にはフルアーマー防護服姿の政治家が来ていた。巷では「獄門病」と呼ばれ、ありもしない風評が飛び交う事態になっていた。

「今回の獄門病……もとい、獄門島での流行り病は単なる水疱瘡で、直ちに影響はないと認識しております。」

「海産物への影響もないとおっしゃるのですか？」

「今のところ影響はないと認識しております。」

「本当に大丈夫なんでしょうか？」

「現時点では影響ないと断言できます。私は幼い頃に水疱瘡を済ませていますから、全く気にはしておりません。一命をとって獄門病……もとい、獄門島の流行り病と対峙してまいります。」

「言いよることと態度が違うじゃねえか！」尾道の漁師達は日頃親しく取引していた獄門島の島民に対する無礼な態度に腹が立っていた。

「おうちに帰りたい！」

と泣いて抵抗する政治屋枝野代議士を乗せた漁船は、獄門島へ向けて港を離れた。

「ボランティアも致します。慈善団体に寄付もします。だから引き返してください！」

と枝野代議士があまりに泣きわめくので、船は獄門島ではなく岩場だけで無人島の悪霊島に横付けして枝野代議士を降ろすと尾道へ戻って行った。

その後、枝野代議士がどうなったかは定かではないが、悪霊島の海底では枝野代議士が着ていた防御スーツがカブトガニの棲み処になっていた。悪霊島の岩場のよどみには大きな耳が漂っていた。

「又エー、チャン。又エー、チャン。」

この日は犬神家の九官鳥の又エちゃんがやけに騒がしく鳴く夜だった。

「又エの鳴く夜は……恐ろしい。」

苗院の庫裏で治療薬の調合をしていた横溝先生は、何か不吉な予感を感じていた。

深夜、日付も変わった新月の晩。お金さんとお銀さんは装束を整え八墓に詣でた。頭には一本の大きなろうそくを鉢巻きで縛り、顔には歌舞伎風の赤と青の隈どりがなされていた。

お金さんの右手には五寸釘、左手には美少女フィギュアが握られ、お銀さんの右手には斧、左手にはニラ一束が握られていた。

「たあたありいじゃあ〜！八墓の祟りじゃあ！」

お金さんとお銀さんは各家を回って家々に棲みつく悪霊をフィギュア人形に封じ込め、斧で魔を断ち切り、ニラで清めて回った。

「泣く子いねえがあ！」

お能ちゃんの宿舎にもお金さんとお銀さんがやってきた。新月の暗闇、ろうそくに灯される老婆二人の顔を見たお能ちゃんは気絶しようとしたが、元々度胸があるので気絶できなかった。

お能ちゃんは畳を這いながら部屋の隅に逃げ、先日松山高等学校の寮で演じた「安達ヶ原」の鬼婆の演技が、本物の迫力には遠く及んでいないことを痛感した。

お金さんとお銀さんは部屋で悪霊払いの舞を舞って去って行った。

お能ちゃんは、お金さんとお銀さんの後を追うように走って行った黒い人影を見た。

「あれが死神？」

お能ちゃんは恐怖のあまり身動きできないままに夜を明かした。

銀河鉄道の窯に石炭を放り込む窯炊きの仕事で真っ黒になったネロさんが、また呼び戻されて獄門島に来ていたのだった。

「人使いが荒すぎる、労働基準に反するブラック小説だ！」

獄門島の鬼首温泉で石炭の汚れを落としたネロさんはまた満州へと戻って行った。

翌朝、港には松山から派遣されてきた医師を乗せた船が着岸した。医師の白衣にはキティちゃんのプリントが施されていた。

満州旅行に行つて留守のほおでえ看護師のハズバンドだった。奥様のほおでえ看護師がこまめに記録したカルテを手に各家庭をまわつて診療する予定だった。

「こんなことになつていたなんて。」

ほおでえ医師は言葉が出なくなつた。相当な被害を予測していたが、皆元気に普通に生活している。疱疹が治つた痕跡はあるものの、熱も下がり痛みがある様子もなく健康な体に戻つていた。日頃から野性的な生活をしてるから回復も常人の粋を越えていたのだった。

島民たちはお金さんとお銀さんの八墓の儀式が、島に入り込んだ悪霊を退治したのだと信じ、犬神文書にも鬼首村誌にもそう記載されることとなつた。

ほおでえ医師は苗院坂を上つて犬神神社に行き、境内の杉の幹に五寸釘で打ち付けられた美少女フィギニアを見つけた。美少女フィギニアの背中にはフルカワ作と書かれていた。

昨夜の八墓の儀式で気絶することもできなかったお能ちゃんは、日が昇るとともにようやく意識を失うことができ、部屋の片隅で座り込んだまま熟睡していた。あまりの驚愕に冷や汗が噴き出し、体に噴き出していた疱疹もその勢いで落ちてしまった。

こうして獄門島を覆つた悪霊は退散したが、そもそも島に水泡瘡を持ち込んだのはこの子娘だった。

ほおでえ医師は鬼首温泉で疲れをいやすと、夕方には船に乗つて松山へと戻つていた。

”獄門島、謎の流行り病根絶！一人の医師の英断！”

愛媛の地元新聞の記事に、単身乗り込んで行つたほおでえ医師の快挙が掲載されるのは数日後だった。